

疑問ある人立ち上がるろう



三浦綾子さんの小説「母」を、ひとりの層に脚色して1993年から演じ、3年前から90分のひとり語りとして続けています。戦前の治安維持法によって弾圧、虐殺された作家・小林多喜二の母セキの

「多喜二の母」を語る演劇人

河東 けいさん (91)

異議あり!
安倍改憲
発言

半生を描いたものです。多喜二は労働者が苦勞しているということを書いただけです。そのことだけで国家権力に殺された。そんなアホなことがありますか。

セキは、普通の母親です。普通の母親だから素晴らし

い。大事に育てたかわいいわが子、あんなにいい子が、なぜ殺されなければいけなかったのか。悪いことはしていないと信じる母親です。無念だったでしょう。他にも世の中を良くしようと、革新的な考えをもつ人が次々と弾圧されました。あんなことが繰り返される世の中になってはいけません。今でも「母」を語っています。

太平洋戦争のさなか、私は大阪から日本女子大の英文学部に進みました。敵性語だと、おおっぴらに勉強できませんでしたが、後に学長にもなった上代タノという立派な先生が「今に英語が必要になる」と、大学の中では堂々と学ぶことができました。

戦争が終わり、今の憲法ができたときは、もう手をあけて大歓迎しました。戦争はとにかくむごいものです。治安維持法の再来と言われる「共謀罪」が通されまし。戦争中は、モノが言えずみんなヒリヒリしていました。あちこちで特高警察が目をはらせていて、「戦争どうなるんかな」「負けるんちゃう」と危惧しただけで、すぐ捕まる。それは怖い時代でした。油断すればあの時代に戻

されますよ。改憲の動きも進んでいきます。9条を壊えようなんて、安倍首相は何をたくらんでいるのでしょうか。よほど戦争がしたいのか。私の兄は学徒出陣で出征しました。運良く帰ってくる事ができたけれど、そうでない人の方がたくさんいました。自分の人間を犠牲にする、戦争なんてくだらないことを考えないでほしい。国家権力は強大です。政権のすることに疑問がある人は、つぶされないようにみんなで立ち上がらないとね。戦前の二の舞いにはさせないよう。

聞き手・写真 丸山裕子